慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『愛の新世界』への誘い
Sub Title	Invitation à la lecture du Nouveau monde amoureux
Author	篠原, 洋治(Shinohara, Hiroharu)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.94, (2008. 6) ,p.253(114)- 269(98)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎没後25周年記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00940001-0269

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『愛の新世界』への誘い

篠原　洋治

はじめに

19世紀初頭のフーリエ主義運動を担った弟子たちにそっとしまい込まれ、シュルレアリズム運動の旗手アンドレ・ブルトンによってその存在を喚起され、シモーヌ・ドゥブーによって1967年になって初めて公刊されたフーリエ（Charles Fourier, 1772–1837）の草稿『愛の新世界』[1]は、その魅力的な表題にも関わらず、『新エロイーズ』に見られる純愛ロマンスもなければ、サドの作品群のようなエロティックな性描写はどこにも見当たらない。またその晦渋な文体と際限なく繰り返される同じテーマは、読者を辟易とさせるものである。この未完の草稿は、1808年に上梓した処女作『四運動の理論』に対する世間の無理解にもめげずフーリエが構想した『大論』の一部で、1810年代にビュジェ地方の姉たちのもとに身を寄せた時期に書かれたものである[2]。その後フーリエは草稿を書き続けるが、『大論』を完成させることなく、愛の領域の秩序形成という『愛の新世界』のテーマを少し横に置いて、むしろ産業の新秩序形成を扱った『家庭的農業アソシアシオン』（1822年）と『ソシエテールな産業的新世界』（1829年）を出版することになる。

本稿は『愛の新世界』散策の「羅針盤」たろうとするものであるが、かならずしも一義的な解釈を押し付けるものではない。「冒険」に満ちた『愛の新世界』を読むという「冒険」の、一つの「水先案内」となればその役割を果たすだろう。

1　情念解放と文明批判

フーリエが生きた時代はフランス革命に始まる政治的動乱の時代であり、経済的にも混乱を極めた時代である。都市には失業者が溢れ、生活のための売春は当たり前のように見られた。人権宣言が謳った自由、平等、博愛もむなしく響いたにちがいない。そうした政治的・経済的無秩序のなかでフーリエは、平和で豊かな産業社会を建設するべく思索を重ねた。フーリエは革命を否定した。自らもリヨン包囲で財産を失ったかれは革命を憎悪したが、それ以上に政治的な改革では世界を変えることは不可能であると考えたからである。かれが着目したのは「政治的なもの」ではなく、生活の様式、経済活動、愛情生活など「生活態＝習俗の領域」であり、その改革の必要を訴えた。フーリエは『四運動の理論』の冒頭で、「一切の先入観に対する絶対的懐疑と、一切の既知の理論からの絶対的隔離とに従いながら」[3]、物質的運動のニュートンの万有引力に匹敵する、社会的運動における「情念引力」の理論を発見したと宣言する。そして、この情念引力論に則ってアソシアシオンを建設し、「生活態＝習俗」の全領域を秩序立てようと考えたのである。そうした変革あってこそ、社会調和が実現し、人類全体に幸福がもたらされると主張した。

ルネ・シェレールも指摘するように、「生活態」の革新に関心を寄せてきたのは、トマス・モア以来のユートピア思想の伝統であるといえる[4]。産業社会の幕開けに位置するフーリエは、「生活態」の中心を、経済活動の場である産業と愛情生活が営まれる家族と捉えながら、この二つの領域を情念引力によって同時に再組織しようと考えたのである。様々な性格をもった1620人の男女によって構成されるアソシアシオンを建設すれば、人間のもつ諸情念はすべて調和的に解放され、人類は不幸な時代「文明」を抜け出し、幸福な時代「調和」に直ちに移行することができるとフーリエは主張した。

『愛の新世界』はこの産業と家族の再組織化のうち、主に家族の領域

の変革を提示するものである。その一見夢想と思われる調和世界の記述にも、文明世界の批判とその変革への意志が満ち溢れているといってよいだろう。テクストの分析に入る前に、まずフーリエの情念理論の骨子を見ておくことにしたい。

フーリエによれば人間は生来12の情念をもっており、時代によって変わることはない。それらは大きく三つのカテゴリーに分類される。第一のカテゴリーは五感の満足を求める「感覚的情念」で、味覚、触覚、視覚、聴覚、嗅覚がこれに当たる。まずこれらが満たされなければ人間は幸福になることはない。第二のカテゴリーは集団を求める「感情的情念」で、友情、野心、愛、家族愛の四つである。そして第三のカテゴリーは、フーリエ独自のものであるが、上に挙げた諸情念を噛み合わせて社会関係を編成する役割を果たす「配分的情念」である。移り気 Papillonne、複合 Composite、密謀 Cabaliste の三つがそれである。「移り気」は変化を求める欲求であり、この情念の解放がなければ人々は倦怠に陥ってしまう。「複合」は二つ以上の情念を組み合わせ、嗜好の同一性に基づいた「複合集団」を形成し、熱狂を生み出す。「密謀」は、陰謀を企て人を出し抜こうという情念で、文明では卑劣とされるが、調和では人々を嗜好の洗練をめぐる競争へと導く機能をもつ。これらの「配分的情念」が解放されるとき、情念引力が十全に働き、社会調和が実現するという。

『愛の新世界』は他の著作と異なり、感情的情念の一つにすぎない「愛」に「基軸的情念」としての重要な位置を与えている。なぜなら「恋愛とは、知られている限りでもっとも強い絆であり、12の情念のうちでこれほど高度の感情に達する情念は他にはない」からだ。また、「それこそは社会的絆の伸張のために期待をかけるべき情念だった」(231, 280–281) からである。『愛の新世界』のフーリエは、恋愛の情念の自由な飛翔に来るべき調和社会の礎を見たのだった。

調和ではどんな例外的な嗜好（情念）も尊重される。これがフーリエの考える自由である。そして後に見るように、例外的な嗜好を広い社会領野のなかで飛翔させることによってこそ、社会調和が実現するとフー

リエは考えた。ところが文明の画一的な道徳規範はいたるところで嗜好（情念）を抑圧し、その発展を阻み、不幸を生み出している。

道徳規範に塞き止められた情念は悲劇を生む。「モスクワのストロゴノフ侯爵夫人は自らの老いを感じながら、一人の美しい侍女に嫉妬していた。そこで夫人は彼女を責め苦にかけさせ、自分もピンで刺したりした。夫人のこの残酷な行為の本当の理由は何だったのだろうか」。それは嫉妬ではなく「愛」であるとフーリエはいう。夫人は自分では気づかずに侍女を愛し始めていたのである。しかし夫人は文明の「先入観」から、「サッフォー愛には思いも及ばす」、情念の「破壊的運動に陥っていたのである。彼女は愉しむはずの対象を迫害していたのだ」。「もし誰かがサッフォー愛の観念を彼女に与え、彼女と犠牲者とを和解させていたならば、この二人は情熱的な恋人同士になっていただろう」（391, 458）。

はけ口を失った情念は恐ろしく暴力的な形で噴出する。情念が不変である以上、われわれにできるのは情念運動に新たな分岐を与え、閉塞を避けることである。だが、それは容易なことではない。先入観が先入観である以上、それがどこに隠されているか分からないからだ。フーリエ自身も長年サッフォー愛者に対する先入観をもっていたが、35歳のときに偶然の出来事から、自分がサッフォー愛者を擁護する奇癖をもっていることに気がついたのであった（392, 460）。このフーリエ自身のエピソードが示しているように、自己の特異な嗜好（情念）に気がつくためには、出来事＝他者との出会いが必要なのである。フーリエはその出会いを組織的に増やすことを考えているが、その点は後で論じることにして、今はかれの情念解放が、抑圧された既知の本質を解放するという「抑圧／解放」の図式には当てはまらないことを確認して、フーリエの文明の分析に耳を傾けよう。

2　文明の兆候読解（文明から調和へ）

来るべき調和は、モアの「ユートピア島」のように現実から隔絶した

ユートピア（非・場所）ではなく、文明のすぐ下で胎動し顕在化を待つトポスであり、情念引力に基づいた渦巻ないしファランジュと呼ばれるアソシアシオンを建設することにより、直ちに現れる「新世界」である。恋愛の領域においてこの潜在する「新世界」を出現させる「てこ」としてフーリエが見出したのは、姦通であった。

文明の道徳は姦通を厳しく断罪する。しかし文明は姦通を原則において批判しながら、事実上は容認しているではないか。批判すべきはむしろこの文明の二枚舌ではないか。「ある男が一晩のうちに10人もの恋人のもとへはせ参じたとすれば、今日なら褒めそやされるだろう」(152, 184)。また、「かならずや秘密が保たれるにちがいないと感じたとたん夫も妻も重婚者となるが、それでいて自分の犯した違反行為には素知らぬ顔をして、配偶者には、忠節であれ、と要求するのだ」(61, 78)。

文明の自己欺瞞は、情念をあるがままに認めず、あるべきこと（規範）を主張することにある。だが、かくも姦通が多く見られるなら、人間は多婚への傾向性をもっていると考えた方が自然ではないか、とフーリエは主張する。「恋愛について完璧に自由である社会秩序では、今日に輪をかけて多婚的になることは間違いない」(298, 346)。

さて、ではなぜ文明において姦通が断罪されているのか。そもそも婚姻制度とはなんなのか。フーリエに代わって文明の哲学者カントに答えてもらおう。「婚姻とは性的能力の相互所有の契約」[5]である。姦通はそれゆえ、その所有権の侵犯ないし契約の不履行として定義づけられる。この所有観念に基づく独占欲こそ、文明人を文明人たらしめているものである。この独占欲が嫉妬を生み不和をもたらすがゆえに、姦通は厳しく取り締まられる。

フーリエは逆に、この姦通という多婚への情念が不和をもたらすならば、単婚制度に無理があると考えた。そして「われわれの慣習では男たちの間の不和と女性に対する軽蔑の種となるこの共有を、友情の絆にかえる計算を発見しさえすればよい」(52, 69) と主張した。フーリエは情念引力に適った規則を発見すべく、文明での「誘引的な息抜き」である

6人ないし8人のパーティを分析する。

文明において3、4組のカップルが集まると、友情の仮面の下で恋愛の絆が結ばれるのが観察される。「野心」や「家族愛」といった他の感情的情念がそこに介在し、噛み合わされることによって「複合情念」が飛翔する。カップルはこうした集まりで飽き飽きしたパートナーを交換することができ、大いに「移り気」を飛翔させる。ところで「こうして淫らがましい集いのときにこそ、隣人の悪口をさんざんにいったり、だれかの評判を上下させるために同盟を結んだりするものだ」(301, 350)。こうして「密謀情念」が解放され、集いはますます魅惑的なものとなる。そして「パーティ参加者は自分たちの間に特殊な絆ができあがっていることを強く感じとっている。これは彼らには名づけようのない一種の魅力であるが、これによって彼らの魂にすばらしい均衡状態が生じるのである」(302, 352)。こうした魂の均衡状態に対してフーリエは、13番目の情念として「統一主義」の名を与えている。

このように文明のなかに「統一主義」の兆候を読み解いたフーリエは、こうした集いの組織化をはかる。調和における多婚の優れた形態である「多婚カドリーユ」がそれだ。調和人は、一年のうちに一人の相手と過ごす「排他的婚姻期」(つまりは単婚期)と、恋愛情念をより広い領野へと解き放つ「交替期」を過ごすことになる。それぞれの期間の長さは各人のもつ情念の複合具合で決まる。たとえば三重情念者は一年の3分の1の排他的婚姻期を過ごし、あとの3分の2を多婚カドリーユに参加し、複数の恋愛関係を同時に結ぶといった具合だ。

例を見よう。二重情念者で対照的な基調情念をもっているクロリスとテラモンは、カドリーユの中枢となるべく、それぞれ4人の友人を連れてくる。クロリスの2人の男、「野心を基調とする男」と「友情を基調とする男」は、テラモンの2人の女、「野心と複合情念を基調とする二重情念女」と「友情と移り気と密謀を基調とする三重情念女」に、その性格の対照性から好意を覚えるようになる。そのことによってクロリスとテラモンの間にも親和力が働き始めるという。人間の性格はおおよそ810

に分類され音階をなしている。各音階が和音を生んだり不協和音を生んだりするように、それぞれの性格の間には引力と斥力が働く。したがってカドリーユの成功の鍵は、性格の対照性をうまく配置することだが、経験豊富な「仙女」がその補助役を買って出る。次々とパートナーを交換していくこのカドリーユによって、「統一主義」の絆が生まれるとフーリエは主張する（303–308, 352–359）。

この多婚カドリーユでは「家族愛」の新たな発展も見られる。カドリーユの絆によって生まれるアソシアシオンにおいても財産贈与が想定されている。富裕な者は、死後、多婚愛期に得た男女の恋人たちに遺産を寄贈する。逆に貧困者は大勢から遺贈を受けることになる。「われわれの間では悪徳呼ばわりされているあの自由恋愛が、調和ではあらゆる動因のうちでもっとも博愛的なものになるのである」（282, 331）。それは産業において、熟練の年老いた師匠と、若き才能ある弟子との間に「産業的養子制度」が考案されたのと同じである[6]。調和では、関係の多数性と複合性、その冪乗的発展が望まれるのである。その意味では単婚の排他的カップルは「考えられるもっとも小さいアソシアシオン」であって、そこから恋愛情念を解き放たなければこうした絆は広がらない。それゆえフーリエは、文明の排他的婚姻制度を厳しく批判したのだった。

こうして排他的な単婚から解放された人々のもつ様々な性格が集団的に配置されるなかで、「情念引力」が働き、それぞれの恋愛を魅惑的なものにする。そしてエゴイズムの対極にある「統一主義」がそこに生まれる。このようにフーリエのユートピアは、文明から調和への不断の「生成変化」（ドゥルーズ）として現れる。

3　天使カップルの博愛

フーリエによれば、恋愛を構成しているのは二つの要素、すなわち物質的要素と精神的要素、唯物愛（amour matériel）と心情愛（amour sentimental）である。この二つの間に中間的なものはない。つまりフーリエは物質と精神の二元論の立場に立っている。かれはこの二つの愛を

峻別したうえで、集団の営みのなかで両者を均衡させることを考えたのである。

フーリエは文明で「最高に滑稽」とみなされている心情愛を擁護する。なぜなら「心情愛は、調和では万人にとって無上の喜びとなり、今日知られていない数限りない洗練を生み出す源となる」(66, 83) からだ。しかし心情愛はその支配力において唯物愛に優ることはない。したがって調和では、「心情愛ができる限り際だつようにし、その影響力が唯物的快楽のものに匹敵するようにすることである。……そこでは、心情愛と官能的な愛がちょうど釣り合いをとっているからこそ、心情愛が光り輝くようになるのだ」(98, 117)。

こうした心情愛と唯物愛の均衡にむけて一役買うのが、「天使」、「修行僧」、「舞姫」たちである。彼らは恋愛においてもたざる大勢の人々を満足させるという慈善的役割を果たす。これらの聖人志願者は「謙虚であり、容姿に恵まれない者たちを幸福にするためにだけ自らの美貌を用いるという善行を果たしたい、と思っている」(148, 180)。『四運動の理論』においてフーリエは、生活にとって絶対必要な「ミニマム」である「労働権」を保障しない人権思想を断罪し、アソシアシオンこそがそれを保障すると謳ったが、恋愛においても「ミニマム」を保障することを考えていたといえる。彼らの職務は文明では売春と呼ばれる行為だが、調和においてそれは、徳に満ちた崇高な博愛主義の実践となる。

調和では、老人さえも性愛の満足が保障される。彼らは、後述する「恋愛戦争」で、捕虜となった若い修行僧たちから、惜しみない祝福を受けることになるのだ (160–161, 192)。また調和では、「女性がもはや若くなくなったときでさえも、数多くの男をものにできるのである」(262, 311)。もちろんそれは強制された行為ではない。「なぜなら調和では何ごとも強制されないからだ」(160, 192)。

ではいかにしてそれは可能か。フーリエは、高貴な博愛主義が心情愛と唯物愛との均衡によって達成される例として、「天使カップル」の献身的行為を挙げている。その様子を見よう。

ナルシスとプシュケはクニドスが誇る美男美女である。両者に恋する男女はそれぞれ20人を下らない。「文明の法に従えばプシュケはただ一人の夫のものとなり、ナルシスもただ一人の妻をもつ以外に方法はない。引力の意見は異なる。引力が望むのは、男女20組におよぶ求愛者たちがナルシスとプシュケの寵愛の分け前を得るということだ」(43–44, 60)。調和ではナルシスとプシュケの間には唯物愛の満足は認められず、心情愛ないし「セラドン愛」しか認められない。彼ら「天使カップル」はそれぞれ、求愛者たちに恩寵を与えなければならない。彼らは、「容姿にたまたま恵まれていない人たちにまめまめしく寵愛を与える」ことによって、公共の祝福を受け、崇拝される (80, 97)。

「天使カップル」のこうした自己献身は、高貴な行為であるだけでなく、所有観念に基づく嫉妬心やエゴイズムを乗り越える祝祭のアレゴリーになっている。文明における「利己主義的ないし非自由な恋愛カップルの方針とは、すべてを私だけのために、他の人々には無を、というものである。累乗的ないし自由な恋愛カップルの方針は、すべてを他の人々のために、私には彼らが私に与えようと望むものだけを、でなければならない」(76, 93)。

調和では、カップルのもつ排他性は多くの他者に対して開かれ、文明の「逆立ちした中心」である自我(モア)がもつエゴイズムは、集団の営みのなかでその対極である「統一主義」へと導かれることになる。それは宗教的な崇高さの生成を通してであった。「天使カップルが与える寵愛とは、それを受けられるすべての恋愛者にとって聖なる慰めであり、恋愛における和合や宗教的統一をかならずや実現させるとともに、人間の嫉妬心が神の精神に吸収されているという証になるのだ」(80, 97)。

しかしながら天使カップル同士の「超越的セラドン愛」は、単なる自己犠牲ではない。遅延された唯物愛は天使カップルに心的エロティシズムを与え、唯物的欲望よりも高い、情念の別のレベルへと運んでいく (92, 110)。このような物質と精神の螺旋的な運動のなかで博愛的献身が実践されるのである。そこにおいて恋愛の情念は、最高レベルの自由、寛大

さに至る（92, 110）。

4　歓待の掟

心情愛と唯物愛の二律背反を乗り越えるという「天使カップル」のテーマは、以下に示す「聖なるヒロインの贖罪」の物語で頂点を極める。それは調和の「統一の掟」を戯曲化したもので、『愛の新世界』の「基軸」である。（174–201, 206–237）

およそ200人の騎士男女からなる「黄水仙群団」の一縦隊が、ロードスとカンディア訪問を前にしてクニドスに逗留にやって来る。彼らはクニドス渦巻に対する入城の奉納として「後宮団」のカドリーユを派遣した。「チェスに似た陣地戦」に比される「恋愛戦争」ゲームのさなか、クニドスの数人の「バッコス巫女」たちがこの前哨カドリーユを捕虜にした。前哨隊を拿捕することはクニドス渦巻の歓待の始まりを示す。偶然にも、世界に知られたグルジア出身の美しき聖なるヒロイン、ファクマがそのなかにいた。

さて捕虜になったファクマは、「恋愛法廷」に出廷し、「贖罪」しなければならない。この高名なヒロインの寵愛を得ようと多くのクニドスの住民が集まった。だが、タタールの族長と一ヶ月に及ぶ排他的な愛欲の日々を過ごしたばかりのファクマは、クニドスでは心の安らぎが欲しいと主張する。すなわち、官能的なもの、物質的なものを一切含まない心情愛に浸りたいというのだ。けれどもこの絶世の美女を前に住民は納得しない。求愛者たちは、彼女の滞在の短さを理由に唯物愛を与えてくれるよう懇願する。いくどかの押し問答のあげく、ファクマは一つの妥協案を出す。「もし、8人の志願者のうち1人が、私が出した条件、すなわち、私と純粋な心情愛、その誠意を私が充分に認めるほど熱心なセラドン愛を結んでくれると約束してくれるなら、その埋め合わせとして残りの7人のうち運命が決める2人に愛の証を授けましょう」と。この提案は、唯物愛のみにとりつかれた求愛者たちの間にますます紛争を起こさせた。そこでファクマは、「もし、あなた方のうち1人が私の願いを叶え

てくれるなら、捕虜生活の後で、他の7人に寵愛を与えましょう」と譲歩するが、求愛者たちはその大役を擦り付けるばかりである。怒ったファクマは、「みながみな物質的な欲望にかられたエゴイスト」であると非難し、一切の交渉を断ち切ってしまう。このとき、求愛者の一人クリテュスが気を失ってしまう。気の毒に思ったファクマは、かれを贖罪の相手として選ぶという。他の求愛者たちは黙っていない。なかでもファクマを懐柔することに専念していたアリストファネスは、本性を露わにし、「ヒロインは戯れに、だれもが彼女に対してたやすく抱くであろう恋情を掻き立て、誠実な求愛者を夢中にさせたあげく、達成不可能な条件によって彼らを失望させたうえで、寵愛の対象から排除するという脅しで苦しめたのです」と訴えた。

尊者ヘロドトスはこの訴えを正当と認め、残念ながらファクマは「統一の掟」に反する「基軸的罪」を犯したのだと宣言する。刑務官イノは、罰として7倍の代償、すなわち54人（原文ママ）のクニドスの住民を満足させなければならないという。ファクマは絶望するが、そこに若く美しい堕天使イゾムが、私は喜んでファクマのいう条件を受け入れ、純粋なセラドン愛を捧げたいと割って入り、物語の進行が逆転する。「ファクマ、あなたは私に恋心以上のものを抱かせます。私の情熱の炎は、他の者たちがあなたから寵愛を受けようと変わりません。私はあなたと永遠なる熱狂的関係を結びたいのです。もっとも厳しい誓いをお命じください。たとえそれがあなたを所有することからの絶対的排除、多くの他の者たちの幸福を見ながら、その熱狂を助長する義務、あなたと快楽を分かち合うことを要求することなく、それを自分のものとして享受する義務、等などであろうと。私はあなたの眼に特別なものとして映るように、私から何かを奪って欲しいのです」。このイゾムの申し出は、ファクマが気まぐれに提出した条件が現実に不可能でないこと、唯物愛に打ち勝つ強い心情愛が存在することを証明したのだった。

ヘロドトスは新たに判決をくだし、アリストファネスは、「嫉妬心と復讐心の情念運動のために、高貴な愛に対する義務を忘れてしまったの

です」と自らの非を認め、他の求愛者とともにサッフォー愛者たちの補助をするという罰に甘んじる。ファクマは今や喜んでみなを歓待することを約束し、クニドスの人々はヒロインへの侮辱を詫び、恋愛法廷は大団円をむかえる。

この寓話に見られるテーマは、ファクマとイゾムの間に生まれた「基軸愛」による、物質的なものに従属した「エゴイズム」の乗り越え、そして「統一主義」の達成である。彼らの行為は、自己の絶対的贈与といえるものである。彼らの模範が、所有観念に基づいた嫉妬、排他的独占欲、何事もギブ・アンド・テイクでしか考えられない文明人の習俗を、一気にひっくり返す。物質と精神の対立は、ファクマが突きつけたダブル・バインドな要求によってその頂点を極めるが、集団の螺旋的な情念運動のなかで別の次元で止揚される。あたかも破られるかのように見えた「統一の掟」は、逆説的にも貫徹されるのである。この「統一主義」生成の鍵を握るのは天使カップルの寛大さ、気前のよさである。フーリエの「新世界」は、ルネ・シェレールの言葉を借りれば、まさに「歓待のユートピア」である[7]。「統一の掟」とは、歓待の掟、他者への開きに他ならない。

しかしもう一人重要な登場人物がいる。アリストファネスである。かれは求愛者たちの代表で、唯物愛の満足しか考えず、それを隠す欺瞞的な文明人である。いいかえれば、愛を所有の観点からしか眺められないごく普通の文明人を代弁している。しかし、かれは最後には回心する。これこそ、文明の習俗が調和の習俗へと転換するカタストロフィ・ポイントをなしている。

愛は唯物愛のエゴイスティックな満足であってはならないし、集団全体の満足も保障されなければならない。文明であれば情念の抑圧によって調整がはかられるだろう。しかし、調和ではいかなる情念も抑圧されてはならない以上、あらゆる情念を集団の営みのなかで、組み合わせ、均衡させ、調和させることがはかられるのだ。この意味でこのファクマの物語は、文明から調和への飛躍を示す特権的アレゴリーなのである。

5　奇癖と彷徨

諸個人のもつ嗜好（情念）を最大限尊重し、その解放をはかる調和では、取るに足らない奇癖（マニ）さえも重要視される。天使カップルが生み出す大饗宴が「無限に大きな」広がりをもった恋愛の実践であったとすれば、個々人の奇癖の実践は「無限に小さな」実践である。しかし「両極端は相通じている」から重要であるという。「調和では、計算にあたって、数の上では無限に少ない奇癖に基礎をおかなくてはならない」(396, 463)。その例外的な奇癖の典型が、以下に示す「踵掻きの奇癖」ないし「愛踵」である。

あるドイツ人の男は、「あるとても美しい女性に何ヶ月もいい寄り、寝床まで押しかけては、彼女を寝かしつけたり、こまごまと世話を焼いたりした。その報酬として、かれはベッドの足元に傅いて15分もの間彼女の踵を掻くことで満足したのである。とはいえ、彼女はすばらしく美しく、手を踵にとどめておくにはもったいない女性だったのだが、この男は幸せだったし、彼女に深い心情愛を抱いていた。男は若く美しく礼儀正しかったので、黄金時代の徳にこそふさわしいこの無邪気な暇つぶしにもかかわらず、彼女は以前から心を寄せていたのである。もちろんこの女性は、踵を愛撫するだけではすまさない他の騎士たちから充分に埋め合わせを受けていた。むしろ私の推察では、だからこそ、彼女はこの風変わりな男に心を寄せていたのだ」(334, 401)。

フーリエにいわせれば、性器的結合のみを求める「単純情念」よりも、心情愛の新たな可能性を示すこうした奇癖の方が、より洗練された快楽をもたらすものである。「快楽を無限に多様化する必要がある調和では、誰にも迷惑をかけずに多くの人々に快楽をもたらすことはつねに善であり、そうした善を当てにしなければならない」(335, 401)。

では、その「愛踵」という奇癖が、調和において果たす役割を見よう。

調和において「人々は、各人の奇癖を文明におけるように揶揄する代わりに、それを集団として結びつけ、奨励することに専念するだろう。

もし大軍隊のなかで、12人の踵を掻くのが好きな男と、この戯れを楽しむ12人の女を出会わせれば、愛踵という変種を得られるであろう。この変種は、他の変種と同じく有益なものとなる。目的は、物質と精神における変種の集団を数多く得ることである。変種が多ければ多いほど、それらの系列すなわち音階を形成することは容易になるであろう。音階のそれぞれの鍵盤には、同一の奇癖に情熱を感ずる男と女からなる集団、すなわち複合集団が含まれるであろう」(335, 401)。

奇癖は稀であれば稀であるほど貴重である。そうした奇癖をもった調和人は、同胞を求めて他の渦巻に向けて「冒険団」、「産業軍」[8]に加わって旅立たなければならない。例外を認めることが真の自由の実現の条件である。「例外がなければ、われわれは政治においては専制に、快楽においては単調さに陥ってしまう」[9]。調和では、奇癖、情念の無限小のニュアンスを尊重し助長しなければならない。そうして生まれる情念の多様性が音階を形成し、引力を生じさせ、音楽的調和をもたらすのである。目指されているのは情念の多様化と洗練である。文明より洗練された習俗を作りあげることがフーリエの目的であった。そして情念の洗練を求めての運動は、人間関係のネットワークを地球全体へと広げていく。

ルネ・シェレールはドゥルーズの概念を援用し、フーリエの世界を「ノマドなユートピア」と呼んだ。調和人はみなノマド（遊牧民）であり、それぞれの渦巻はそうした旅人を歓待する。この開きと歓待こそ、フーリエのユートピアの「基軸的」特徴である。それはモアのユートピアと好対照をなしているだろう。「ユートピア島」はもともと半島であったが、ユートプス王はこの地を征服すると同時に、兵士にも手伝わせ、大陸とつなぐ部分を15マイルに渡って掘り起こさせて大陸から切り離してしまった。こうして脅威をもたらす「外部」から切り離された無菌の「内部」としての「ユートピア島」が誕生するのである。これに対してフーリエのユートピアは、つねに外に対して開いている。むしろ「外部」の侵入こそが、「内部」を活性化させるのである。

結びに代えて——情念のユートピア

前世紀以来ユートピアがデストピアになるのを目撃して来たわれわれが、ユートピアを語ることは難しい。ハイエクがいうように設計主義的なユートピアは個人を抑圧する全体主義的なものとなるだろう。

しかし見てきたように、フーリエの「新世界」には、あらかじめ書かれた設計図があるわけではない。「情念の計算」に基づいた集団の配備と儀礼的な掟（ルール）に従った、エゴイズムから統一主義へ向けての情念運動が、文明から調和への不断の生成変化を生み出している。フーリエの「新世界」は「渦巻」という名前が示すようにそうしたダイナミックなユートピアなのである。

そうした「新世界」の情念運動を構成する要素は、自己同一性をもった個人ではなく、各個人がもつ特異な情念、奇癖、性格である。フーリエの世界には情念を抑圧する法は存在しない。そもそも法に従う主体、主体化された人格が存在していないのである。したがってサドの世界のように、法と欲望の対立、法の侵犯としての快楽といったものは考えられない。むしろサドの倒錯を情念の閉塞とみなし、情念運動に新たな分岐を与えること、快楽の多様化を通して文明よりもはるかに洗練された習俗を作り上げること、これがフーリエのもくろみだった。

フーリエは恋愛におけるエゴイズムの背後に所有観念を見たが、法主体としての人格が情念運動のなかで消え去っていくとすれば、所有権ももはや意味をなさなくなるであろう。こうして調和人は、恋愛の自由の躓きの石である嫉妬を難なく乗り越えることができる。

ところで、情念の解放を訴えるフーリエ思想が、1968年の5月革命の進展の過程で、ある種の共鳴現象を起こしたことはよく知られているが、ブランショは『明かしえぬ共同体』第二部「恋人たちの共同体」のなかで次のようにいっている。

「68年5月は、容認されたあるいは期待された社会的諸形態を根底から揺るがせる祝祭のように、不意に訪れた幸福な出会いのなかで、爆発

的なコミュニケーションが企ても謀議もなしに発現しうる（発現の通常の諸形態をはるかに超えて発現する）のだということをはっきりと証明した。それは、各人に階級や年齢、性や文化の相違をこえて、一人一人が初対面の人と、あたかもすでに愛している人と付き合うように付き合うことができる開きであった」[10]。

これをフーリエの次の発言と隣接させることができるだろう。

「一度も会ったことのない人々の間に集合的かつ個人的な友情を突然に生じさせているということは、文明では王たちでさえそなえてない美点である。ソシエテール秩序〔＝調和〕ではどんなに貧しい者でもこういう享楽を確実に手に入れる」[11]。

68年世代のシェレールは手放しの共感をもって、ブランショの同じくだりをフーリエ的だと引用しているが[12]、ただしフーリエの友愛は、各人のもつ特異性の間に情念引力が働き、お互いを引き合うことによって絆が生まれるというものである。シェレールがいうように、それは人格の共同体ではなく、特異性に基づく共同体、非人称的であるが特異な共同体である。いいかえれば、調和世界は主体以前の「特異性」に導かれるままに彷徨する「ただの人間」[13]のユートピアなのである。

今日、ユートピアが考えられるとしたら、われわれにはフーリエとともに冒険に旅立ち、独創的で斬新な快楽を発見することが求められているのではないだろうか。

註

1　Charles Fourier, *Le Nouveau monde amoureux*, in *Œuvres complètes de Charles Fourier*, Éditions Anthropos, 1966–68, t. VII. シャルル・フーリエ『愛の新世界』、福島知巳訳、作品社、2006年。引用・参照箇所を文中に（原典頁，邦訳頁）で示す。尚、訳語・訳文はかならずしも既訳によってない。「草稿」の運命については、同書の訳者「解説」が詳しい。

2　Jonathan Beecher, *Charles Fourier : the visionary and his world*, University of California Press, 1986, ch. 7. ジョナサン・ビーチャー『シャルル・フーリエ伝：幻視者とその世界』、福島知己訳、作品社、

2001年、第7章、参照。

3 Charles Fourier, *Théorie des quatre mouvements et des Destinées générales*, in *Œuvres complètes de Charles Fourier*, Éditions Anthropos, 1966–68, t. I, p. 5. シャルル・フーリエ『四運動の理論』、巖谷國士訳、現代思想社、1970年、上巻19頁。

4 René Schérer, *Utopies nomades : en attendant 2002*, Séguier, 1996, p. 100. ルネ・シェレール『ノマドのユートピア』、杉村昌昭訳、松籟社、1998年、90頁。

5 Immanuel Kant, "Die Metaphysik der Sitten", *Immanuel Kants Werke*, Band 7, Suhrkamp, 1922, S. 81–82. イマヌエル・カント「人倫の形而上学」、吉澤傳三郎訳（『カント全集』、第11巻、理想社、1975年）、122–123頁。

6 拙稿「ファランジュの建設、あるいはドメスティックな改革」（野地洋行編『近代思想のアンビバレンス』、御茶の水書房、1997年）、参照。

7 René Schérer, *Zeus Hospitalier, éloge de l'hospitalité*, Armand Colin, 1993, ch. VI. ルネ・シェレール『歓待のユートピア、歓待神礼讃』、安川慶治訳、現代企画室、1996年、第六章、参照。

8 調和における「産業軍」は文明の軍隊とは違い、戦争のためのものでなく、大河に架橋をしたり、堤防を築いたり、砂漠を開墾したりする機関である。複数の渦巻から若者たちが10万人単位で招集されるが、その最大の「誘引源」となるのは毎夜、仕事の後に開かれる大饗宴である（339, 405）。

9 Feuillet manuscrit isolé de Charles Fourier cité par Simone Debout, in Charles Fourier, *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales*, J.-J. Pauvert, 1967, p. 247.

10 Maurice Blanchot, *La communauté inavouable*, Minuit, 1983, p. 52. モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』、西谷修訳、筑摩書房、1997年、64頁。

11 Charles Fourier, *Théorie de l'Unité universelle*, 3e volume, in *Œuvres complètes de Charles Fourier*, Éditions Anthropos, 1966–68, t. IV, pp. 369–370. ただし前掲訳書『愛の新世界』、618頁に該当箇所の訳がある。引用の括弧内は筆者が補った。

12 René Schérer, *Utopies nomades : en attendant 2002*, pp. 219–220. ルネ・シェレール『ノマドのユートピア』、194頁。

13 René Schérer, *Regards sur Deleuze*, Éditions Kimé, 1998, ch. 3 et ch. 4. ルネ・シェレール『ドゥルーズへのまなざし』、篠原洋治訳、筑摩書房、2003年、第3章、第4章、参照。